The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

天台大師の十乗観法に関する考察
――『観心論疏』との比較を通して――

村上明也

一　問題の所在

天台大師智顗（五三八―五九七）が開皇十四年（五九四）に荊州玉泉寺で講説した『摩訶止観』は、門人章安灌頂（五六一―六三二）によって聴記本、整理本、修治本、再治本と次第に纏められ、本書は大業三年（六〇七）から貞観六年（六三二）までの間に現行形態が整ったと考えられている。[1] ところが、現行の『摩訶止観』が完成するまでの間、灌頂は聴記した『摩訶止観』に再三の整備を行っているにも関わらず、本書が如何なる経緯を辿って現在の形に纏められたかという具体的な編集作業の事実は未だ謎に包まれたままなのである。

佐藤哲英博士の研究に従うと、智顗親撰『観心論』の注釈書である灌頂自撰『観心論疏』[2]には、智顗講説当初の聴記本に近い『摩訶止観』が長文で引用されていると考えられており、この『観心論疏』依用の『摩訶止観』と現行の『摩訶止観』とを比較することで、現行の『摩訶止観』における四種三昧の組織の整備や一念三千説の加上が灌頂の手によるものであるとの結論を下された。[3]

そこで筆者も佐藤博士と同様の方法を用いて、現行『摩訶止観』の十境・十乗観法と『観心論疏』依用の『摩訶止観』の当該箇所を子細に対比してみたところ、智顗講説当初の『摩訶止観』と現行の『摩訶止観』とには、「十乗観法」の捉え方に決定的な相違のあることが分かってきたのである。

したがって、本稿では「十乗観法」内に見られる「四種三昧」の語を中心に現行の『摩訶止観』と『観心論疏』依用の『摩訶止観』における観法把捉の相違について検討したい。

二　現行『摩訶止観』における修道論

そもそも、十境・十乗観法の先駆は、すでに智顗前期時代の『次第禅門』などに見られるが、それが纏まって説かれるのは、やはり開皇十三年（五九三）講説の『法華玄義』、開皇十四年（五九四）講説の『摩訶止観』、開皇十五年（五九五）

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

撰述の『三観義』『四教義』など、後期時代の書物である。しかしながら、『法華玄義』『三観義』『四教義』などでは、「十乗観法」が極めて簡潔に述べられており、『摩訶止観』以外にそれを詳説するものはない。

さて、現行『摩訶止観』の修道論は、巻第二之上、巻第四之上、巻第五之上よりそれぞれ説かれる「四種三昧」「二十五方便」「十境・十乗観法」がその中心となる。すなわち、行者は「四種三昧」という具体的な行法規定にしたがって、用心法である「二十五方便」や「十乗観法」を適用していくのが、『摩訶止観』の行体系といって異論ないかと思う。

よって、次項では「十乗観法」内に説かれる「四種三昧」の用語を中心に現行の『摩訶止観』及び『観心論疏』依用の『摩訶止観』を比較検討していきたい。

三　「十乗観法」と「四種三昧」の関係

現行『摩訶止観』の「十乗観法」中には「四種三昧」に関説する文が計五箇所に見られるが、[4]『観心論疏』依用の『摩訶止観』は、現行の『摩訶止観』と巻数や分量が同じでない。よって、ここでは天台大師講説当初の『摩訶止観』と現行の『摩訶止観』とで比較対照可能な三文を示しておこう。

『摩訶止観』巻第七之上[5]

若不入者更研餘品。勤観念處名四正勤者、観心十界、未生六道正勤。見思本起名已生悪、観於即空令已生不生故勤精進。塵沙無明名未生悪、観即假即中、令未生不生故勤精進。竭力盡誠行四三昧、遮此二悪。

『観心論疏』巻第五[6]

悪心勤遮令莫生。已生勤斷令滅。未生四聖善心勤令生。已生勤令増長。是名四正勤。又勤滅九界勤生佛界也。

『摩訶止観』巻第七之上[7]

第七助道對治者、釈論云、三三昧為一切三昧作本也。若入三三昧能成四種三昧。根利無遮易入清涼池。不須對治。・・中略・・若人修四三昧道品調適、解脱不開。而慳貪忽起、激動観心、於身命財守護保著。・・中略・・修三昧時破戒心忽起。威儀麤獷無復矜持。身口乖違觸犯制度。淨禁不淳三昧難發。是時當用尸羅為治。

『観心論疏』巻第五[8]

七修六度助道。何者上修道品調停而真明不開。或正修観時破戒心起。三業乖違犯於戒律。

『摩訶止観』巻第七之下[9]

若圓教次位者、於菩薩境中應廣分別。但彼證今修故須略辨。若四種三昧修習方便。通如上説。唯法華懺別約六時五悔重作方便。

『観心論疏』巻第五[10]

然欲入圓位者、更約六時修五悔助顕理観。第一懺悔。先須識順流十心之過。・・中略・・次修逆生死海十心者、翻破前十心。

すなわち、第六「道品調適」の四正勤に関する箇所には、現行の『摩訶止観』にだけ「四種三昧」なる文字が付加され、また第七「助道対治」では、両書とも六度で六蔽を対治するという組織がほぼ同じであるにも関わらず、『観心論疏』依用の『摩訶止観』が「正修観の時、破戒の心起こ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

れば」とするのに対し、現行の『摩訶止観』は「三昧を修する時、破戒の心忽ちに起れば」とあり、「正修観」が現行の『摩訶止観』では四種の「三昧」となっている。さらに第八「知次位」では、両書に「円位」「六時」「五悔」の本文的一致が見られるものの、現行の『摩訶止観』にのみ「四種三昧」及び「法華懺法」なる語が添えられる。

そこで、現行『摩訶止観』と『観心論疏』依用の『摩訶止観』における観法把捉の相違を考える上で注目されたいのは、第八「知次位」において『観心論疏』依用の『摩訶止観』が「順流の十心」及び「逆流の十心」を論じていることである。紙数の都合上、両書における「順流の十心」だけを対比してみたい。

『摩訶止観』巻第四之上(11)

順流十心者、一自従無始闇識昏迷、・・中略・・業則流轉生死。二者内具煩悩、外値悪友、・・中略・・三者内外悪縁既具、能内滅善心、外滅善事。又於他善、都無隨喜。四者縦恣三業、無悪不為。五者事雖不廣、悪心遍布。六者悪心相續、書夜不斷。七者覆諱過失不欲人知。八者魯扈底突、不畏悪道。九者無慚無愧。十者撥無因果作一闡提。是為十種順生死流昏倒造悪。廁蟲樂廁、不覺不知、積集重累不可稱計、四重五逆極至闡提、生死浩然而無際畔。入生死大苦海中。知過必改方可悔也。

『観心論疏』巻第五(12)

何者一者内有無明、由迷心中佛界、起六道生死也。二者外逢悪友。・・中略・・三不隨喜他善、内不信心中佛界、外不隨喜善事。四縦恣三業造罪。由内有無明、外逢悪境致之然也。五事雖不遍而心普遍。・・中略・・而心遍造六道悪業也。六悪念相續、三毒四趣悪心迭互相續也。七覆藏不悔。・・中略・・八不畏悪道。・・中略・・九無慚無愧、・・中略・・十撥無因果作一闡提。・・中略・・夫欲悔者、必須識此順流十心、流

つまり、現行『摩訶止観』の「逆順の十心」は、『観心論疏』依用の『摩訶止観』における「逆順の十心」と用語や内容の上でほぼ同じでありながらも、「二十五方便」第一「具五縁」の「持戒清浄」に説かれていたのである。この「逆順の十心」が「十乗観法」から「二十五方便」へと移行した理由の一つとして考えられるのは、『観心論疏』に用いられた『摩訶止観』と現行『摩訶止観』における「逆順の十心」の目的が以下のように異なるためである。

『観心論疏』依用の『摩訶止観』「知次位」

常ニ於テ六時ニ修シ此ノ五悔ヲ、助ク明カニスルヲ圓観ヲ。（大正蔵四六、六一九上）

現行『摩訶止観』「持戒清浄」

云何ンカ懺悔スルヤ。設ヒ入ルモ道場ニ、徒ラニ爲シテ苦行ヲ終ニ無シ大益。（大正蔵四六、四〇下）

すなわち、智顗講説当初の『摩訶止観』の「逆順の十心」は円観を明らかにする「（十乗）観法」であり、他方、現行の『摩訶止観』における「逆順の十心」は「四種三昧」に入るための「（二十五）方便」として位置付けられている。

四　まとめ

以上、「十乗観法」と「四種三昧」の関係を中心に『観心

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

論疏』依用の『摩訶止観』と現行の『摩訶止観』とを詳細に比較してきた。

これまでの検討結果に従うと、現行『摩訶止観』の「十乗観法」中には計五段落にもわたって「四種三昧」との関係が説かれるが、智顗講説当初の『摩訶止観』の「十乗観法」には「四種三昧」なる語が一切見られなかったのである。

そればかりか、『観心論疏』依用の『摩訶止観』の「十乗観法」第八「知次位」における「逆順の十心」は、現行の『摩訶止観』に至ると「二十五方便」第一「持戒清浄」に位置しており、智顗講説当初の「十乗観法」の組織と相当異なっていることも分かってきた。

さらに、この「逆順の十心」が「知次位」から「持戒清浄」に移行した理由については、『観心論疏』依用の『摩訶止観』が「逆順の十心」を「正観」と捉えるのに対し、現行『摩訶止観』が「逆順の十心」を「四種三昧」修習の「方便」と理解することに基づいていたのである。

したがって、天台大師講説当初の『摩訶止観』は、円観（「十乗観法」）を中心とした修道体系であり、現行の『摩訶止観』は、円観よりも行法（「四種三昧」）中心の修行論を展開させていることが窺知されよう。

1　佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、昭和三六年、三六四～四〇〇頁）を参照。

2　『観心論疏』の撰述年は不明であるが、本疏は仁寿二年（六〇三年）から大業元年（六〇五）の間に成立したと考えられている。（佐藤哲英『続天台大師の研究』（百華苑、昭和五六年、三五七～三七九頁））。

3　佐藤哲英『前掲書』（昭和五六年、三八〇～三九一頁・三九二～四一〇頁）を参照。

4　『摩訶止観』巻第六之下「陰入界境」の第四「破法遍」（『大正蔵』巻四六・八四中）に一箇所、巻第七之上「陰入界境」の第六「道品調適」（『大正蔵』巻四六・九〇上）に一箇所。残りの三文は本文中に紹介している。

5　大正蔵四六、八九中。
6　大正蔵四六、六一六上～中。
7　大正蔵四六、九一上。
8　大正蔵四六、六一六下。
9　大正蔵四六、九八上。
10　大正蔵四六、六一八中～下。
11　大正蔵四六、三九下～四〇上。
12　大正蔵四六、六一八中～下。

〈キーワード〉　十乗観法、四種三昧、二十五方便、智顗、灌頂

（龍谷大学大学院）

NII-Electronic Library Service